

文ぶん鳥ちよう夏目なつめ漱石そつせき

十月 早稲田わせだに移る。伽藍がらんのような書齋にただ一人、片づけた顔を頬杖ほおじえで支えていると、三重吉みえきちが来て、鳥を御飼おかいなさいと云う。飼かってもいいと答えた。しかし念のためだから、何を飼かうのかねと聞いたたら、文鳥ですと云う返事であった。

文鳥は三重吉の小説に出て来るくらいだから奇麗きれいな鳥に違なかつと思つて、じゃ買かってくれたまえと頼んだ。ところが三重吉は是非御飼おかいなさいと、同じような事を繰り返している。うむ買かうよ買かうよとやはり頬杖ほおじえを突いたままで、むにやむにや云いつてるうちに三重吉は黙もくつてしまった。おおかた頬杖ほおじえに愛想を尽かしたんだらうと、この時始めて気がついた。

すると三分ばかりして、今度は籠かごを御買おかいなさいと云いだした。これも宜よろしいと答えると、是非御買おかいなさいと念を押す代りに、鳥籠とりかごの講釈こうしゃくを始めた。その講釈はだいぶ込み入こったものであったが、気の毒な事に、みんな忘れてしまった。ただ好よいのは二十円ぐらいすると云う段になつて、急にそんな高価たかいでなくつても善よ

からうと云つておいた。三重吉はにやにやしている。

それから全体どこで買かうのかと聞いて見ると、なにどここの鳥屋とりやにでもありますと、実に平凡な答をした。籠かごはと聞き返すと、籠かごですか、籠かごはその何ですよ、なにどこにかあるでしょう、とまるで雲を攫つかむような寛大な事を云う。でも君あてがなくなつちやいけなからうと、あたかもいけないような顔をして見せたら、三重吉は頬ほべたへ手をあてて、何でも駒込こまごに籠かごの名人があるそうですが、年寄だそうですから、もう死んだかも知れませんが、非常に心細くなつてしまった。

何しろ言いだしたものに責任を負わせるのは当然の事だから、さつそく万事を三重吉に依頼する事にした。すると、すぐ金を出せと云う。金はたしかに出した。三重吉はどこで買かつたか、七子ななこの三つ折みつおの紙入かみいれを懐中かいちゆうして、人の金でも自分の金でも 悉皆しつがいこの紙入かみいれの中に入れる癖がある。自分は三重吉が五円札をたしかにこの紙入かみいれの底へ押し込んだのを目撃した。

かようにして金はたしかに三重吉の手に落ちた。しかし鳥と籠かごとは容易にやつて来ない。

そのうち秋が小春こはるになつた。三重吉はたびたび来る。よく女の話などをして帰つて行く。文鳥と籠かごの講釈は全く出ない。硝子戸ガラスドを透すかして 五尺えんがわの縁側えんがわには日が好く

伽藍…寺の大きな建物。
早稲田…地名。東京の地区。
三重吉…作家・鈴木三重吉のこと。
「赤い鳥」などが有名。

講釈…それほどもないことを、もつたいぶつて説明すること。
二十円…現在の五万円くらい。

雲を攫つかむような話などが、おおびつばで、不確かである。あたかも…ちようどびつたり、まるで。
駒込…地名。東京の地区。

七子…絹織物の一種。魚子とも書く。
紙入…お礼を入れるほそ長い財布。懐中する…ふところに入れる。
悉皆…みな、のこらず。
すつかり、まるで。

五尺…約一・五メートル。
一尺は約三・三センチメートル。

当る。どうせ文鳥を飼うなら、こんな暖かい季節に、この縁側へ鳥籠を据えてやつたら、文鳥も 定めし鳴き善からうと思つてくらひであった。

三重吉の小説によると、文鳥は千代千代と鳴くそうである。その鳴き声がいぶん気に入ったと見えて、三重吉は千代千代を何度となく使っている。あるいは千代と云う女に惚れていた事があるのかも知れない。しかし当人はいつこうそんな事を云わない。自分も聞いてみない。ただ縁側に日が善く当る。そうして文鳥が鳴かない。

そのうち霜が降り出した。自分は毎日伽藍のような書齋に、寒い顔を片づけてみたり、取乱してみたり、頬杖を突いたりやめたりして暮していた。戸は二重に締め切った。火鉢に炭ばかり継いでいる。文鳥はついに忘れられた。

ところへ三重吉が門口から威勢よく這入って来た。時は宵の口であった。寒いから火鉢の上へ胸から上を脱して、浮かぬ顔をわざとほてらしていたのが、急に陽気になった。三重吉は 豊隆を従えている。豊隆はいい迷惑である。二人が籠を一つずつ持っている。その上に三重吉が大きな箱を兄き分に抱えている。五円札が文鳥と籠と箱になったのはこの初冬の晩であった。

三重吉は大得意である。まあ御覧なさいと云う。豊隆その洋灯をもつとこつちへ出せなと云う。そのくせ寒いので鼻の頭が少し紫色になつてゐる。

なるほど立派な籠ができた。台が漆で塗つてある。竹は細く削つた上に、色が染けてある。それで三田だと言う。安いなあ豊隆と言っている。豊隆はうん安いと云っている。自分は安いか高いか 判然と判らないが、まあ安いなあと云っている。好いのになると二十円もするそつですと云う。二十円はこれで二返目である。二十円に比べて安いのは無論である。

この漆はね、先生、日向へ出して曝しておくうちに黒味が取れてだんだん朱の色が出て来ますから、そうしてこの竹は一返善く煮たんだから大丈夫ですよなどと、しきりに説明をしてくれる。何が大丈夫なのかねと聞き返すと、まあ鳥を御覧なさい、奇麗でしようと言っている。

なるほど奇麗だ。次の間へ籠を据えて 四尺ばかりこつちから見ると少しも動かない。薄暗い中に真白に見える。籠の中にうずくまっていなければ鳥とは思えないほど白い。何だか寒そつだ。

寒いだろつねと聞いてみると、そのために箱を作つたんだと云う。夜になればこの箱に入れてやるんだと云う。籠が二つあるのはどうするんだと聞くと、この粗末な方へ入れて時々 行水を使わせるのだと云う。これは少し 手数がかかると思つて

定めし、「きつとだろつ」「まちがいなく」「だ」という気持ちを表す時に使うことば。

ところへ……そこへ。宵の口…夜になつて、まもなくのころ。

豊隆…小宮豊隆。夏目漱石の弟子で、「三四郎」のモデルといわれる。作家。

判然…はっきりと。

四尺…約一・二メートル。

行水…たらいに湯や水を入れてその中に入り、からだのあせを洗いながすこと。

手数…ものごとをするのに必要な労力や時間。

いると、それから糞ふんをして籠かごを汚よごしますから、時々掃除そうじをしておやりなさいとつけ加えた。三重吉は文鳥のためにはなかなか強硬きやうごうである。

それをはいはい引受けると、今度は三重吉が袂たもとから粟あわを一袋出した。これを毎朝食あさめしわせなくっちゃいけません。もし餌えをかえてやらなければ、餌壺えじぼを出して殻からだけ吹いておやんなさい。そうしないと文鳥が実みのある粟あわを一々拾ひろい出さなくっちゃなりませんから。水みづも毎朝まいあさかえておやんなさい。先生せんせいは寝坊ねぼうだからちよつと好このいでしょうと大変文鳥おおいに親切しんせつを極まめている。そこで自分おれもよろしいと万事受合うけあった。ところへ豊隆とよたかが袂たもとから餌壺えじぼと水入みずいれを出して行儀ぎよよく自分の前に並べた。こういつさい万事を調しらえておいて、実行じっぎんを運はられると、義理ぎりにも文鳥おおいの世話せわをしなければならなくなる。内心うちこころではよほど 覚束おぼつかなかつたが、まずやってみようとまでは決心けつこころした。もしできなければ家の物ものが、どつかするだろつと思おもった。

やがて三重吉は鳥籠とりかごを叮嚀ていねいに箱の中へ入れて、縁側えんがわへ持ち出して、ここへ置きますからと云いつて帰かえった。自分は伽藍がらんのような書齋しよさいの真中まんなかに床とこを展のべて冷やぶかに寝た。夢ゆめに文鳥おおいを背負しよい込んだ心持こころもちは、少し寒さむかつたが眠ねつてみれば 不断ふたんだんの夜よるのごとく穩ゆかである。

翌朝あしたあさ眼まなこが覚さめると硝子戸びやうしどに日ひが射している。たちまち文鳥おおいに餌えをやらなければならぬと思おもつた。けれども起きるのが 退儀たいぎであつた。今いまにやろつ、今いまにやろつと考かんがえているうちに、とつとつ八時過やちじかになつた。仕方がないから顔を洗あらついでをもつて、冷ひやたい 縁えんを素足すあしで踏ふみながら、箱はこの蓋ふたを取とつて鳥籠とりかごを 明海あけのみへ出した。文鳥おおいは眼まなこをばちつかせている。もつと早く起きたかつたろつと思おもつたら氣きの毒どくになつた。

文鳥おおいの眼まなこは真黒まじろである。臉おもての周圍まわりに細こまい淡紅たんかう色の絹糸ぬいを縫ぬいつけたような筋すじが入いっている。眼まなこをばちつかせるたびに絹糸ぬいが急に寄よつて一本いっぴんになる。と思おもつとまた丸まるくなる。籠かごを箱はこから出すや否いなや、文鳥おおいは白しろい首くびをちよつと傾かたけながらこの黒くろい眼まなこを移うつして始めて自分の顔かほを見た。そうしてちちと鳴ないた。

自分は静しずかに鳥籠とりかごを箱はこの上に据たえた。文鳥おおいはぱつと留とまり木きを離はなれた。そうしてまた留とまり木きに乗のつた。留とまり木きは二本ある。黒味くろいがかつた青軸あおのちくをほどよき距離かほに橋はしと渡わたして横よこに並ならべた。その一本いっぴんを軽く踏ふまえた足あしを見るといかにも 華奢わしやにできている。細長こほろびい薄紅うすかうの端はなに真珠まじゆを削けずつたような爪つめが着かいて、手頃てぐらな留とまり木きを甘あまく抱かかえ込んでいる。すると、ひらりと眼先まなこが動ういた。文鳥おおいはすでに留とまり木きの上うへで方向むきを換かへていた。しきりに首くびを左右さゆうに傾かたける。傾かたけかけた首くびをふと持ち直ただして、心持こころもち前まへへ伸のじたかと思おもつたら、白しろい羽根はねがまたちらりと動ういた。文鳥おおいの足あしは向むかうの留とまり木きの真中まんなかあたりに具合ぐあひよく落おちた。ちちと鳴なく。そうして遠とほくから自分の顔かほを覗のぞき込んだ。

粟…穀物の一種で、実は黄色で小つぶ。菓子かしの材料ざいりょうや小鳥こどりのえさなどにする。

義理…人とのつきあい、かならず守り、どうしてもしなければならぬこと。
覚束ない…ものごとがうまくいかどうかうたがわしい。あぶなかつたよりに。
不断…「普段」と同じ。いつせ。

退儀…「大儀」と同じ。何をすのもめんどいな感じ。
縁…縁側のこと。
明海…明るいところ。

華奢…からだやすがたがたちがぼつそりして、上品しんぴんで弱々しい。

自分は顔を洗いに風呂場へ行つた。帰りに台所へ廻つて、戸棚を明けて、昨夕三重吉の買つて来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、また書齋の縁側へ出た。

三重吉は 用意周到な男で、昨夕叮嚀に餌をやる時の 心得を説明して行つた。その説によると、むやみに籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまふ。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へあてがって、外から出口を塞ぐようにしなくつては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならぬ。とその手つきまでして見せたが、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事ができるのか、つい聞いておかなかつた。

自分はやむをえず餌壺を持つたまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振り返つた。そして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ左の手の処置に 窮した。人の隙を窺つて逃げるよつな鳥とも見えないので、何となく気の毒になつた。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏を始めた。細く削つた竹の目から暖かいむく毛が、白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭になつた。粟の壺と水の壺を留り木の間にようやく置くや否や、手を引

き込みました。籠の戸ははたりと自然に落ちた。文鳥は留り木の上に戻つた。白い首を半は横に向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして足の下にある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行つた。

その頃は日課として小説を書いている時分であつた。飯と飯の間はたいてい机に向つて筆を握つていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事ができた。伽藍のような書齋へは誰も這入つて来ない習慣であつた。筆の音に淋しさと言ふ意味を感じた朝も昼も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がびたりとやむ、またやめねばならぬ、折もだいがあつた。その時は指の股に筆を挟んだまま手の平へ顎を載せて硝子越に吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが済むと載せた顎を一応撮んで見る。それでも筆と紙がいつしよにならぬ時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると縁側で文鳥がたちまち千代千代と二声鳴いた。

筆を擱いて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木の上から、のめりそつと白い胸を突き出して、高く千代と云つた。三重吉が聞いたらとぞ喜ぶだろつと思つほどな美しい声で千代と云つた。三重吉は今に馴れると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ、と受合つて帰つて行つた。

自分はまた籠の傍へしゃがんだ。文鳥は膨らんだ首を二三度豎横に向け直した。

用意周到：用意が十分にとのつて手ばかりがないこと。
心得：心えること。心えておくべきこと。覚悟。
のみこんで処置すべきこと。はからい。

窮する：ものごとにいきつまる。どうしたらよいのかわからなくて困る。

やがて一団の白い体がぼいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗な足の爪が半分ほど餌壺の縁から後へ出た。小指を掛けてもすぐ引繰返りそんな餌壺は釣鐘のように静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のような気がした。

文鳥はつと嘴を餌壺の真中に落した。そうして二三度左右に振った。奇麗に平して入れてあった粟がはらはらと籠の底に零れた。文鳥は嘴を上げた。咽喉の所で微かな音がする。また嘴を粟の真中に落す。また微かな音がする。その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。量ほどな小さい人が、黄金の槌で瑪瑙の碁石でもつづけ様に敲いているような気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅のようである。その紅がしだいに流れて、粟をつつく口先の辺は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が粟の中へ這入る時は非常に早い。左右に振り蒔く粟の珠も非常に軽そうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに尖った嘴を黄色い粒の中に刺し込んで、膨くらんだ首を惜気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然として静かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分ほどだと思つ。

自分はそつと書齋へ帰って淋しくペンを紙の上にとららしていた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代千代とも鳴く。外では木枯が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲むところを見た。細い足を壺の縁へ懸けて、小さい嘴に受けた一掬を大事そうに、仰向いて呑み下している。この分では一杯の水が十日ぐらい続くだろうと思つてまた書齋へ帰った。晩には箱へしまつてやつた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降っていた。文鳥は箱の中でこもりともしなかつた。

明る日もまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやつたのは、やっぱり八時過ぎであった。箱の中ではとうから目が覚めていたんだらう。それでも文鳥はいつこつ不平らしい顔もしなかつた。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたいたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔美しい女を知っていた。この女が机に凭れて何か考えているところを、後から、そつと行つて、紫の帯上の房になった先を、長く垂らして、頸筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はものうげに後を向いた。その時女の眉は心持八の字に寄っていた。それで眼尻と口元には笑が萌していた。同時に恰好の好い頸を肩まですくめていた。文鳥が自分を見た時、自分はふとこの女の事を思い出した。この女は今嫁に行った。自分が紫の帯上でいたすらをしたのは縁談のきまつた二三日後である。

惜気もなく…なく
すことを残念に思
つ気持ちもなく
寂然…ものさびし
いさま。静かなさ
ま。
一寸五分…約四・
五センチメートル。
一寸は約三・〇三
センチメートル。

しばたいたいて…し
きりにまばたきを
する。
心持…気持ち。
ほんの少し。

ものうげに…なん
となくだるくて気
が進まなような様
子で。

餌壺にはまだ粟が八分通り這入っている。しかし殻もだいが混っていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、奇く濁っていた。易えてやらなければならぬ。また大きな手を籠の中へ入れた。非常に要心して入れたにもかかわらず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小さい羽根が一本抜けても、自分は文鳥にすまないと思った。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯がどこかへ持って行った。水も易えてやった。水道の水だから大変冷たい。

5

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代千代と云う声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。しかし縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、あちらへ飛んだり、こちらへ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている。少しも不平らしい様子はなかった。

10

夜は箱へ入れた。明る朝目が覚めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覚めているだろうが、なかなか起きる気にならない。枕元にある新聞を手に取るさえ難儀だ。それでも煙草は一本ふかした。この一本をふかしてしまつたら、起きて籠から出してやろつと思ひながら、口から出る煙の行方を見つめていた。するとこの煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の女の顔がちょっと見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。そうし

15

て箱の蓋をはずして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら千代千代と二声鳴いた。三重吉の説によると、馴れるにしたがつて、文鳥が人の顔を見て鳴くようになるんだそうだ。現に三重吉の飼っていた文鳥は、三重吉が傍にいさえすれば、しきりに千代千代と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌を食べると云う。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。

5

次の朝はまた怠けた。昔の女の顔もつい思ひ出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気がついたように縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留り木の上を面白そうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸して籠の外を下の方から覗いている。その様子がなかなか無邪気である。昔紫の帯上でいたずらをした女は襟の長い、背のすらりとした、ちよつと首を曲げて人を見る癖があつた。

10

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は粟も水も易えずに書齋へ引込んだ。

昼過ぎまた縁側へ出た。食後の運動 かがたが、五六間の 廻り縁を、あるきながら 書見するつもりであつた。ところが出て見ると粟がもう七分がた尽きていた。水も全く濁ってしまった。書物を縁側へ抛り出して置いて、急いで餌と水を易えて

15

奇く……ひどく。

要心……「用心」と同じ。

かがたが……ついでに。かねて。

五六間……約九〜十一メートル。一間は約一・八メートル。廻り縁……部屋の外側をとりまく縁。書見……書物を読むこと。

やった。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗って飯を食うまでは縁側を覗かなかった。書齋に帰ってから、あるいは昨日のようになり、家人が籠を出しておきはせぬかと、ちよつと縁へ顔だけ出して見たら、はたして出してあった。その上餌も水も新しくなっていた。自分はちよつと安心して首を書齋に入れた。途端に文鳥は千代千代と鳴いた。それで引込めた首をまた出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかった。けげんな顔をして硝子越しに庭の霜を眺めていた。自分はちよつとつ机の前に帰った。

書齋の中では相変らずペンの音がさらさらする。書きかけた小説はだいぶんはかどつた。指の先が冷たい。今朝埋けた佐倉炭は白くなって、薩摩五徳に懸けた鉄瓶がほとんど冷めている。炭取は空だ。手を敲いたがちよつと台所まで聴えない。立って戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上じつと留っている。よく見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上から「こんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片づいてゐる。

自分は不思議に思った。文鳥について万事を説明した三重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰った時、文鳥の足はまだ一本であった。し

ばらく寒い縁側に立って眺めていたが、文鳥は動く気色もない。音を立てないで見つめていると、文鳥は丸い眼をほかに細くし出した。おおかた眠たいのだろうと思つて、そつと書齋へ這入ろうとして、一歩足を動かすや否や、文鳥はまた眼を開いた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を開てて火鉢へ炭をついだ。

小説はほかに忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなったような心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分はただ文鳥の声を聞くだけが役目のようになつた。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。たいていは狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を満足そうに往復していた。天気の良い時は薄い日を硝子越しに浴びて、しきりに鳴き立てていた。しかし三重吉の云つたように、自分の顔を見て「とさむらに鳴く気色はむらになつた。

自分の指からじかに餌を食うなどと云う事は無論なかつた。折々機嫌のいい時は麵麩の粉などを人指指の先へつけて竹の間からちよつと出して見る事があるが文鳥

はたして…予想通りに。

佐倉炭…千葉県でつくられている黒炭。
薩摩五徳…薩摩地方でつくられた陶器で、火鉢の火の上に鉄瓶などをかけるのに使う道具。

例に似ず…ふだんとはかわつて、めずらしく。
こんで…かがんで。
総身…からだ全体。

はけっして近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼を乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであった。二三度試みた後、自分は気の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまつた。今の世にこんな事のできるものがあるかどうかはなはだ疑わしい。おそらく古代の聖徒の仕事だろつ。三重吉は嘘を吐いたに違ない。

或日の事、書齋で例のごとくペンの音を立てて侍びしい事を書き連ねていると、ふと妙な音が耳に這入つた。縁側でさらさら、さらさら云つ。女が長い衣の裾を捌いているようにも受取られるが、ただの女のそれとしては、あまりに仰山である。難段がある、内裏雜の袴の襷の擦れる音とても形容したらよかるうと思つた。自分を書きかけた小説をよそにして、ペンを持ったまま縁側へ出て見た。すると文鳥が行水を使つていた。

水はちようと易え立ててであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛まで浸して、時々白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にしゃがむように腹を押しつけつつ、総身の毛を一度に振っている。そうして水入の縁にひよいと飛び上る。しばらくしてまた飛び込む。水入の直径は一寸五分ぐらいに過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余り、背は無論余る。水に浸かるのは足と胸だけである。それでも

文鳥は欣然として行水を使っている。

自分は急に易籠を取つて来た。そうして文鳥をこの方へ移した。それから如露を持つて風呂場へ行つて、水道の水を汲んで、籠の上からさあさあとかけてやつた。如露の水が尽きる頃には白い羽根から落ちる水が珠になつて転がった。文鳥は絶えず眼をばちばちさせていた。

昔紫の帯上でいたすらをした女が、座敷で仕事をしていた時、裏二階から懐中鏡で女の顔へ春の光線を反射させて楽しんだ事がある。女は薄紅くなつた頬を上げて、繊い手を額の前に翳しながら、不思議そうに瞬をした。この女とこの文鳥とはおそらく同じ心持だろつ。

日数が立つにしたがつて文鳥は善く囀る。しかしよく忘れられる。或る時は餌壺が粟の殻だけになつていた事がある。ある時は籠の底が糞でいっぱいになつた事がある。ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子越に差し込んで、広い縁側がほの明るく見えるなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乗っていた。その隅に文鳥の体が薄白く浮いたまま留り木の上に、有るか無きかに思われた。自分は外套の羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやつた。

翌日文鳥は例のごとく元気よく囀つていた。それから時々寒い夜も箱にしまつ

聖徒…キリスト教徒。特に、キリストの弟子。

仰山…はなはだ多いさま。おおげさ。おおまよつ。

よそにする…放つておく。

欣然…よろこんでする様子。

如露…じょうろのこと。花や草に水をかける道具。

てやるのを忘れることがあった。ある晚いつもの通り書齋で 専念にペンの音を聞いていると、突然縁側の方でがたりと物の覆った音がした。しかし自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立って行って、何でもないといいまいから、気にかからぬのではなかつたが、やはりちょっと聞耳を立てたまま知らぬ顔ですましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであつた。便所に行ったついで、気がかりだから、念のため一応縁側へ廻つて見る。

5

籠は箱の上から落ちてゐる。そうして横に倒れてゐる。水入も餌壺も引繰返つてゐる。粟は一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出している。文鳥はしびやかに鳥籠の棧にかじりついてゐた。自分は明日から蓄つてこの縁側に猫を入れまいと決心した。

10

翌日文鳥は鳴かなかつた。粟を山盛入れてやった。水を漲るほど入れてやった。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動かかなかつた。午飯を食つてから、三重吉に手紙を書こうと思つて、二三行書き出すと、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥がまたちちと鳴いた。出て見たら粟も水もだいぶん減つてゐる。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

15

翌日文鳥がまた鳴かなくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹を圧しつけていた。胸の所が少し腫らんで、小さい毛が漣のように乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来てくれと云う手紙を受取つた。十時までにと云う依頼であるから、文鳥をそのままにしておいて出た。三重吉に逢つて見ると例の件がいろいろ長くなって、いっしょに午飯を食つ。いっしょに晩飯を食つ。その上明日の会合まで約束して宅へ帰つた。帰つたのは夜の九時頃である。文鳥の事はすっかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ這入つて寝てしまつた。

5

翌日眼が覚めるや否や、すぐ例の件を思い出した。いくら当人が承知だつて、そんな所へ嫁にやるのは行末よくあるまい、また子供だからとこへでも行けと云われる所へ行く気になるんだらう。いったん行けばむやみに出られるものじゃない。世の中には満足しながら不幸に陥つて行く者がたくさんある。などと考へて楊枝を使つて、朝飯を済ましてまた例の件を片づけに出掛けて行つた。

10

帰つたのは午後三時頃である。玄関へ外套を懸けて廊下伝いに書齋へ這入るつもりで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反繰返つてゐた。二本の足を硬く揃えて、胴と直線に伸ばしてゐた。自分は籠の傍に立つて、じつと文鳥を見守つた。黒い眼を眠つてゐる。臉の色は薄蒼く変つた。

15

餌壺には粟の殻ばかり溜つてゐる。啄むべきは一粒もない。水入は底の光るほど

専念に…一つのこ
とだけに心をそそ
いで。

しのびやか…しの
んでするさま、ひ
そかにするさま。

漲る…いまにも出
そうなほど、いっ
ぱいにみちる。

洒れている。西へ廻った日が硝子戸を洩れて斜めに簾に落ちかかる。台に塗った漆は、三重吉の云ったごとく、いつの間にか黒味が脱けて、朱の色が出て来た。

自分は冬の日に色づいた朱の台を眺めた。空になった餌壺を眺めた。空しく橋を渡している二本の留り木を眺めた。そうしてその下に横わる硬い文鳥を眺めた。

自分はここんで両手に鳥籠を抱えた。そうして、書齋へ持って這入った。十畳の真中へ鳥籠を卸して、その前へかじこまって、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握って見た。柔かい羽根は冷きっている。

拳を籠から引き出して、握った手を開けると、文鳥は静に掌の上にある。自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見つめていた。それから、そっと座布団の上に卸した。そうして、烈しく手を鳴らした。

十六になる小女が、はいと云って敷居際に手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握って、小女の前へ抛り出した。小女は俯向いて畳を眺めたまま黙っている。自分は、餌をやらぬから、とうとう死んでしまったと云いながら、下女の顔を睥めつけた。下女はそれでも黙っている。

自分は机の方へ向き直った。そうして三重吉へ端書をかいた。「家人が餌をやらぬものだから、文鳥はとうとう死んでしまった。たのみせぬものを籠へ入れて、

しかも餌をやる義務さえ尽くさないのは残酷の至りだ」と云う文句であった。

自分は、これを投函して来い、そうしてその鳥をそっちへ持って行けと下女に云った。下女は、どこへ持って参りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持って行くと怒鳴りつけたら、驚いて台所の方へ持って行った。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋るんだ埋るんだと騒いでいる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御嬢さん、ここいらが好いでしょと云っている。自分は進まぬながら、書齋でペンを動かしていた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になってようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日植木屋の声のしたあたりに、小さい公札が、蒼い木賊の一株と並んで立っている。高さは木賊よりもずっと低い。庭下駄を穿いて、日影の霜を踏み碎いて、近づいて見ると、公札の表には、この土手登るべからずとあった。筆子の手蹟である。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想な事を致しましたとあるばかりで家人が悪いとも残酷だともいっごう書いてなかった。

小女…年のいかぬ
女中。

下女…雑事にめし
つかわれる女。

木賊…つくしに似
たシタ植物。

筆子…漱石の娘。